

## パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚について

田 辺 三千広

### はじめに

15世紀末期、全ルーシの統一を目指すモスクワ大公イヴァン三世の宮廷下で一つの事件が起こる。年代記によると次のように述べられている。

「7007 (1499) 年 1 月、大公は自分の貴族イヴァン・ユーリエヴィチ公とその子供、そしてセミヨン・イヴァノヴィチ・リャポロフスキー公を逮捕するように命じた。そして、セミヨン・イヴァノヴィチ・リャポロフスキー公を処刑するように命じた。2 月 5 日、火曜日、モスクワ川の橋の下で彼の首は切り落とされた。一方、イヴァン・ユーリエヴィチ公は罪一等が減じられ、修道士としてトロイツキー修道院に追放された。また、彼の息子のヴァシーリー・イヴァノヴィチ・クリヴォイ公はキリロ・ベロゼルスキー修道院に追放された。」<sup>(1)</sup>

別の年代記では次のように述べられている。

「7006 (1498) 年 2 月、大公イヴァン・ヴァシーリエヴィチは自分とステファン・ヴォロシスキーの孫ドミトリー・イヴァノヴィチを大公の位に就けた。イヴァン・ユーリエヴィチ公とその息子の逮捕について。そして、セミヨン・リャポロフスキー公の処刑について。大公イヴァン・ヴァシーリエヴィチは自分の貴族であるイヴァン・ユーリエヴィチ公と息子たちのヴァシーリー公とイヴァン公を逮捕し、彼らを処刑しようとした。府主教シモンと主教たちが彼ら

を処刑しないようにと赦免を願い出た。大公は、イヴァン公をモスクワで剃髪させ、彼を鎖につなぎ、セルギー修道院に送るように命じた。一方、息子のヴァシーリー公もモスクワで剃髪させ、鎖につなぎ、キリル修道院に送るように命じた。大公はセミヨーン・リャポロフスキー公を処刑し、モスクワ川で首を切り落とすように命じた。その年の4月、大公イヴァン・ヴァシーリエヴィチは、ヴァシーリー・ロモダノフスキー公とトヴェーリ人アンドレイ・コロボフを逮捕した。<sup>(2)</sup>

この時期は、イヴァン三世にとっては重要であった。すなわち、モスクワ公国による統一国家建設への最終段階であるリトアニア公国との戦争の前夜であった。にもかかわらず前年の後継者問題、さらに側近であった大貴族の処刑や追放といった宮廷内の混乱が続いている。

リトアニア戦争は1500年に始まる。この戦争はイヴァン三世にとって避けて通れないものであった。かつてモンゴル支配下にあったルーシの混乱に乗り、リトアニアはキエフを含む西半分のルーシの地域を自領に加えた。これを回復し全ルーシを統一することがイヴァン三世の最終目標であった。

1490年にイヴァン三世の長男で後継者であったイヴァンが病死する。それによって後継者問題が宮廷に持ち上がる。すなわち、長男のイヴァンとモルダヴィア公ステファンの娘エレナとの間に生れたドミトリーが後を継ぐべきか、それともイヴァン三世と再婚相手ソフィア・パレオロークとの間に生れたヴァシーリーかという争いであった。この争いはモスクワ公国内でくすぶっていた新旧の相続方法の葛藤の一つと考えることもできる。1498年2月に孫のドミトリーがモスクワ大公として戴冠された。しかし、ドミトリーには大公としての権限はほとんどなかったようである。<sup>(3)</sup>翌年の1499年3月、イヴァン三世は、ドミトリーからノヴゴロドを取りあげ、ヴァシーリーにノヴゴロドとプスコフの大公という称号を与えた。やがて、1502年4月11日にドミトリー

とその母親エレナを軟禁し、監視下に置いた。そしてその3日後にヴァシーリー三世が大公位に就いた。

上述の年代記にはパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚についての原因は語られていない。イヴァン三世の宮廷で中心的な役割を果たしていた三人の有力貴族がなぜこの時期に失脚したのか。リトアニア戦争に関係しているのか、それとも、後継者問題をめぐる宮廷内の権力闘争によるのか。また、何ゆえ、両家の処罰が異なったのか。本稿ではこれらの点を検討したい。

### 学説史

パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚について、帝政時代の歴史家ソロヴィヨフが言及している。彼は『ステペンナヤ・クニ-ガ』の記述に従って両家の失脚の原因を説明している。『ステペンナヤ・クニ-ガ』では、1499年3月21日に大公イヴァン三世は、自分の息子ヴァシーリーを「君主にして大公に任命した」という記述に続いて次のように伝えられている。

「この少し前、二年前のようにある人々による謀反が起こり、彼らに対して怒りが表された。その後大公は以前の謀反のときのように全員を詳しく審問し、それによってセミヨン・リャポロフスキー公を断首刑に処すように命じた。イヴァン・ユーリエヴィチ公と彼の息子ヴァシーリー・コソイについては府主教や他の主教の願いにより彼らに恩情がかけられた。すなわち、彼らは死刑にはならなかった。彼らは修道士にさせられ、追放された。」<sup>(4)</sup>

ソロヴィヨフは次のように書いている。

年代記作家は、謀反、すなわち、パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の裏切りがどのようなものであったかをにおわすだけで説明はしていない。し

かしはっきりしていることは、この謀反、すなわち、裏切りがエレナとドミトリーの利益を守るため、ソフィアと彼女の息子に反対しての行動であったということである。<sup>(5)</sup>

ソロヴィヨフは、両家の失脚をいわゆる「イヴァン三世の後継者争い」に結び付けて説明をしている。しかし、それに続いて次のようにも述べている。

まだ昔の諸公や貴族の慣習に従っていたパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の行動は、勤務諸公や貴族と君主たる大公との新しい関係を求めるイヴァンには気に入らないものであったということである。ポーランド王に対して派遣された使節団にイヴァンは指示を与えて次のように述べている。「何事にもあなた方の間では穏やかでいるために、酒を飲むときも用心深くするように。あなた方の不注意からわれらの名を辱めることがあってはならないので酒は飲み過ぎないようにしなさい。決まり通りに振舞わなければ、あなた方だけでなく我々も恥をかくことになる。それゆえ、あなた方はすべての点で注意深く振舞うように。セミヨン・リャポロフスキー公とイヴァン・ユーリエヴィチの息子ヴァシーリー公が傲慢な振る舞いを行ったのと同じように振舞ってはならない。」<sup>(6)</sup>

このように述べ、ソロヴィヨフは失脚の直接的な原因を彼ら二人の外交使節時の振る舞い、すなわち、外交の失敗によるものと匂わせている。

ソロヴィヨフの見解に反対したのが Я.С. ルリエーであった。彼は、パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公がエレナとドミトリーに近い関係にあったというソロヴィヨフの考えを批判した。ルリエーによれば、当時教会内にはびこっていたノヴゴロド・モスクワ異端の支持者とみなされていた書記官フョードル・クーリツィンやその支持者とリャポロフスキー公やパトリケーエ

フ父子の関係は疑わしく、また、証拠もない。さらに、リャポロフスキー公が処刑され、パトリケーエフ父子が修道院に流された時点では、イヴァン三世の後継者争いにおいてはヴァシーリーに対するドミトリーの優位がまだ保たれていた時期であり、ドミトリーの失脚に伴って両家が失脚したわけではなかった。それゆえ両家の失脚とヴァシーリーへのノヴゴロドとプスコフの譲渡とは無関係であった。また、パトリケーエフ父子の減刑を嘆願したのが当時の異端摘発運動の指導者であった修道院長ヨシフ・ヴォロツキーへの支持者で異端者の敵であった府主教シモンであったことから、パトリケーエフ父子が異端の協力者と考えられているエレナやドミトリーの側についていたとは考えられない。<sup>(7)</sup>

それゆえ、ルリエーは、ソロヴィヨフが引用した『ステペンナヤ・クニーガ』の情報を信用できないものとしている。彼は、『ステペンナヤ・クニーガ』が時期的に遅い、16世紀30年代に編纂された史料であり、内容的にも極端に偏向しているとして退けている。

ルリエーは、ソロヴィヨフの後半部分の意見には同意している。すなわち、彼は、ポーランド王に対して派遣された使節団へのイヴァン三世の指示を引用し、リャポロフスキー公とパトリケーエフ父子の失脚は、宮廷内の後継者争いではなく、外交に関係したものであったと結論付けている。<sup>(8)</sup>

Л.В. Челепнинは、ルリエーの考えとは逆にパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公をヴァシーリーよりもドミトリーのグループに近い関係にあると考えた。彼は、パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚についての問題を『1497年法典』の編者決定の検討に絡めて考えている。これまで『法典』の編者はヴァシーリーの支持者で書記官の B. グーセフとされてきた。この考えをチェレプニンは否定し、1497-98年の法典草案の審議において重要な役割を担ったのはパトリケーエフ父子であり、彼らはヴァシーリーの支持者とは対立的であったという結論に至った。逆に彼らは『法典』の編纂過程で書記官

フョードル・クーリツィンと近い関係をもった。クーリツィンはドミトリーの母親エレナと同じく異端運動の協力者として知られていることから、パトリケーエフ父子は、ヴァシーリーよりもドミトリーに近い関係にあったと考えられた。<sup>(9)</sup>

その上でチェレブニーンは、パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚の原因を、計画されているルーシ・リトアニア戦争に結び付けている。彼は、ニーコン年代記の記述から次のように考えた。ニーコン年代記の1499年の項では次の順序で一連の事件が並べられている。(1)リャポロフスキー公の処刑とパトリケーエフ父子の修道院への追放。(2)イヴァン三世はノヴゴロドとプスコフを孫のドミトリーから奪い、息子のヴァシーリーに与える。(3)イヴァン三世はリトアニア大公アレクサンデルに使者を送り、自分の娘でアレクサンデルの後であったエレナを正教からカトリックに改宗させないようにと牽制する。(4)イヴァン三世はリトアニアの支配下にあったルーシの亡命諸公を所領ともどもモスクワに受け入れる(亡命諸公とは、セミヨーン・イヴァノヴィチ・ベリスキー公、ドミトリー・シェミャーカの孫のヴァシーリー・イヴァノヴィチ公、シェミャーカの協力者の息子セミヨーン・イヴァノヴィチ・モジャイスキー公らをさす)。<sup>(10)</sup>

ヴァシーリーへのノヴゴロドとプスコフの移譲と亡命諸公の受け入れは、明らかにリトアニアとの来るべき戦争でモスクワ公国の西部国境を強化するという目的を持っていた。リトアニアとの戦争とそのため亡命諸公の受け入れを進めるイヴァン三世にとってはこれらのことに反対するパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公は邪魔であり、それが両家の失脚につながったとチェレブニーンは考えた。<sup>(11)</sup>

パトリケーエフ父子は、ドミトリーをイヴァン三世の後継者に推すグループに属していて、そのグループはリトアニアとの戦争に反対していた。ドミトリーの母親エレナは、モルダヴィア公ステパンの娘であり、1499年当時、イヴァ

ン三世の同盟者ステパンはリトアニアとの友好関係を重視し、戦争は望んではいなかった。<sup>(12)</sup> このように述べるチェレブニーンは、パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚の原因を外交関係の変化に求めている。

さらにチェレブニーンは、パトリケーエフ家とリャポロフスキー家のモスクワ大公ヴァシーリー二世時代からの大公家との関係を年代記から引用している。<sup>(13)</sup> ヴァシーリー二世時代に起こったモスクワの内乱、すなわち、モスクワ大公家と分領諸公との争いのとき、モスクワ貴族であった両家は一貫して大公家の側について戦った。<sup>(14)</sup> それゆえ、当時、モスクワ大公家と戦い、敗れ、亡命していた分領諸公を再びモスクワ側に迎え入れようとするイヴァン三世の試みにはパトリケーエフ父子もリャポロフスキー公も同意できなかった。これらのが原因で彼らは失脚したのであろう。以上がチェレブニーンの結論である。<sup>(15)</sup>

H.A. カザコーヴァは、ルリエーと同じく『ステペンナヤ・クニーガ』の記述を信頼できないものとして退けている。<sup>(16)</sup> また、イヴァン三世の宮廷での後継者争いにおいてパトリケーエフ父子が果たした役割に関して16世紀前半の年代記が何も言及していないことについて彼女は次のように書いている。すなわち、当時、その手に権力を握っていた人物の利害関係によってそのことは説明されると述べている。1499年に息子のヴァシーリー・パトリケーエフはキリロ・ベロゼルスキー修道院に追放され、そこで彼は剃髪を受け、修道名ヴァシアンを名乗る。その後、モスクワ大公ヴァシーリー三世の時代の1509年ごろモスクワに帰ることを許された。やがてヴァシーリー三世の信頼を得るようになり、1531年の教会裁判で有罪・投獄されるまでの間、「時の人」と呼ばれるほどの権勢を誇った。このヴァシアン・パトリケーエフがヴァシーリー三世の庇護のもと絶大な権力を握っていた時代に、彼にとって都合の悪い内容の話は年代記に残すことはできなかったのであろう。

カザコーヴァは、パトリケーエフ父子がモスクワ大公イヴァン三世の後継

者をめぐる争いで孫のドミトリーを支持したと考えている。彼女によると、1499年から1502年までの時期、ドミトリー支持グループとヴァシーリー支持グループとの間では、政治的にはその勢力は拮抗していた。イヴァン三世は一時遠ざけていたヴァシーリーとその母親ソフィアを許し、ヴァシーリーをノヴゴロドとプスコフの大公に任命した。一方、ドミトリーは、その立場が弱くなったとはいえ、依然として全ルーシの大公であり、イヴァン三世の後継者の地位にとどまっていた。パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚は、政治力を回復したヴァシーリーへのイヴァン三世からの贈り物であった。そして、それはドミトリーの政治力、すなわち、モスクワ大公位の継承者としてふさわしいかどうか疑問を抱かせることになった。イヴァン三世にとって二人の後継者候補のうちどちらに大公位を譲るかというとき、彼のためらいと優柔不断を示す事例となった。<sup>(17)</sup>

カザコーヴァは、パトリケーエフ父子がドミトリー支持グループに属していた例として、イヴァン三世の書記官であり、また、異端の共鳴者として知られるフョードル・クーリツィンとの近い関係にも言及している。ドミトリーの母親エレナ・ヴォロシャンカが当時ロシア教会に蔓延していたノヴゴロド・モスクワ異端の参加者の一人であったことから、クーリツィンもドミトリー支持グループの重要なメンバーの一人と考えられていた。1490年代にはパトリケーエフ父子はクーリツィンと共に国家的職務を担ってきた。たとえば、1494年、ヴァシーリー・パトリケーエフ公とリャポロフスキー公はクーリツィンを伴い、平和条約締結のためにリトアニアを訪問した。それ以外でもクーリツィンはパトリケーエフ父子が中心となっておこなわれた法典作成にも参加していた。また、1497年、イヴァン三世によって計画された分領公、すなわち、ヴォロツキー公フョードルとイヴァンに対する土地割り当てにも彼らは協力してことに当たった。さらに、後に書かれるヴァシアン・パトリケーエフの著作の中にノヴゴロド・モスクワ異端のイデオロギーが見られる。それはクーリツィンを通



じてヴァシーリー・パトリケーエフに伝えられたものであったのではないか。以上のことからカザコーヴァは、パトリケーエフ父子がクーリツィンを通してドミトリー支持グループと近い関係を持ち、それゆえに、ドミトリーの対抗者であるヴァシーリーの権力が回復・増大し始めた 1499 年にパトリケーエフ父子の失脚が起こったのだらうと結論した。<sup>(18)</sup>

カザコーヴァは、パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公がドミトリー支持グループと近い関係にあったとする点では先のチェレプニンの考えと同じであった。しかし、彼らが親リトアニア派であったとするチェレプニンの見解には否定的である。カザコーヴァはパトリケーエフ父子が親リトアニア派であったことを示す史料が無いと指摘している。C.M. カシュターノフの考えに同調して次のように述べている。1492 年にリトアニア使節がモスクワにやって来た。使節はそのときイヴァン・パトリケーエフ公を訪問し、彼にリトアニアとルーシの間に平和条約を結ぶための協力を要請した。しかし、使節がパトリケーエフ公に近づいたのは、彼が親リトアニア的政治志向をもっていたからではなく、単にモスクワ大公に近い貴族であったからに過ぎなかった。<sup>(19)</sup> また、ヴァシーリー・パトリケーエフが 1494 年に使節としてリトアニアに派遣された。それは彼が特別に親リトアニア的思考を持っていたからではなく、政権に影響力を持つ一族に属していたことからこの任務を引き受けたと考えられる。また、1495 年以降、モスクワとリトアニアの関係が比較的安定していた時期に、パトリケーエフ父子はリトアニアに関する問題には直接関与しなかった。このように考え、カザコーヴァはパトリケーエフ父子が親リトアニア派であったとはいえないとしている。<sup>(20)</sup> しかし、この説明は、先のパトリケーエフ父子とフョードル・クーリツィンとの近い関係を指摘した説明と相容れないように思える。

ヴァシーリー・パトリケーエフ公とリャポロフスキー公の「傲慢」な振る舞いがイヴァン三世の怒りをかい、それが両家の失脚につながったとするソロヴィ

ヨフの説に対してもカザコーヴァは否定的である。もし、1494年のリトアニアでのヴァシーリー・パトリケーエフ公とリャポロフスキー公の「傲慢さ」が彼らの失脚に決定的な役割を果たしたと考えるならば理解できないことがある。一つ目は、何ゆえ、イヴァン三世は「傲慢」に振舞った彼らを5年後に処罰することにしたのかである。二つ目は、何ゆえ、彼らの「傲慢さ」にもかかわらず、パトリケーエフ家は1490年代末までイヴァン三世の信頼を得て国家統治において目覚ましい活躍を続けることができたのかという点である。以上のようにカザコーヴァは、ヴァシーリー・パトリケーエフ公とリャポロフスキー公のリトアニアでの振る舞いが両家の失脚につながったとする説を否定した。<sup>(21)</sup>

パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚の主な原因として、カザコーヴァは次のように考えている。彼らが後継者争いにおいてドミトリー支持グループに加担したこと、そして、イヴァン三世の息子ヴァシーリーが最初は自分の競争相手ドミトリーの支持者たちに、次いで競争相手自身に仕返しをするために父親との和解を受け入れたことが両家失脚の主な原因であった。また、複雑な外交事情（リトアニアに対するイヴァン三世の政策転換）とドミトリー支持グループの異端者たちとの関係がヴァシーリーの成功を後押しした。1499年のパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚はドミトリー失脚の予兆であった。以上がカザコーヴァの見解であった。

イギリスのロシア史家 J.L.I. フェネルは、イヴァン三世の宮廷下で起こった後継者問題を検討する過程でリャポロフスキー公の処刑とパトリケーエフ父子の流刑の原因について次のように述べている。彼によると、1499年の事件の原因についてははっきりした結論を得ることはできない。できることは三人の貴族がドミトリー支持グループとヴァシーリー支持グループのどちらのグループに属していたのかという問題を検討し、それが後継者争いである、いわゆる、「王朝危機」に関係していたのか、外交に関係していたのか、内政に関係していたのかを決定しようとするだけでしかないと述べている。<sup>(22)</sup>そして、

彼はパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公はドミトリー・グループではなくヴァシーリー・グループに共感をもっていたと考えた。

その根拠として、次の三点を挙げている。(1) ヴァシーリーがモスクワ大公になったとき、彼はヴァシアン(ヴァシーリー・パトリケーエフの修道名)を流刑から解放し、モスクワに住むことを許した。(2) 府主教シモンがパトリケーエフ父子を支持し、その口添えで彼らは処刑を免れ、流刑に減刑された。シモンは異端摘発者ヨーフ・ヴォロツキーの強力な支持者でもあった。そのことからシモンは異端の協力者が多かったドミトリー・グループよりも反対派のヴァシーリー・グループに近かったと考えられる。また、シモンは分領諸公にも共感し、大公の弟ウグリチ公アンドレイに対するイヴァン三世の処置に不満を示し、そのことで大公を非難している。<sup>(23)</sup>(3) リャポロフスキー公の親戚でパトリケーエフ父子とも政治的に親しい関係にあったヴァシーリー・ロモダノフスキー公がリャポロフスキー公の処刑の3ヵ月後の1499年4月に逮捕された。リャポロフスキー公の父イヴァン・スタロドゥプスキー＝リャポロフスキー公はロモダノフスキー公の祖父フョードル・スタロドゥプスキー公と兄弟であった。そしてロモダノフスキー公はモスクワの外交活動に参加する以前、分領公ミハイル・ヴェレイスキーの宮廷で貴族として仕えていた。そのミハイル公の息子はソフィア・パレオロークの姪と結婚していたことから、ロモダノフスキー公とヴァシーリー・グループとの間には深い繋がりにあったと考えられる。

以上の三つの根拠でフェネルはリャポロフスキー公やパトリケーエフ父子がヴァシーリー・グループと近い関係にあったと結論付け、彼ら三人の失脚はヴァシーリー・グループにとっては打撃となったと考えた。<sup>(24)</sup>その証拠としてフェネルは1500年に再びモスクワから逃亡したヴァシーリーの行動をあげている。モスクワ大公イヴァン三世はヴァシーリー・グループに譲歩をし、その打撃を和らげようとした。すなわち、イヴァン三世は、ヴァシーリーを許

し、1499年3月にノヴゴロドとプスコフの大公位を与えたが、ソフィアとヴァシーリーはそれに満足しなかった。さらに、イヴァン三世はノヴゴロド大主教やノヴゴロドの修道院に属する土地を没収し、それを封としてヴァシーリーに仕える小貴族に分与したが、彼らはそれにも満足しなかった。そしてその結果、1500年、不満を持ったヴァシーリーはイヴァン三世を困らせるかのようにモスクワから逃亡した。その計画は成功し、イヴァン三世はヴァシーリーを呼び戻した。なぜなら、イヴァン三世にとって1480年の自分の弟の反乱と同じもう一つ別の反乱というリスクを犯すことができなかったことと、いまだにモスクワカリトアニアのどちらの側に味方するか態度を決めかねている西部ルーシ諸公の手にヴァシーリーが落ちることを恐れたからであった。ヴァシーリーのモスクワへの帰還はドミトリーとその母親エレナの失脚を意味した。<sup>(25)</sup>

このようなフェネルの解釈にジミンも批判を加えているが、それについては次節に譲る。

A.A. ジミンは、当時のルーシとリトアニアを取り巻く国際関係を詳しく検討した結果、モスクワ大公イヴァン三世の対リトアニア政策の変更がパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚の主な原因であったと考えた。彼の結論は以下である。パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公失脚の直接的原因はルーシとリトアニアの和解政策の破綻である。1494年の平和条約締結は両国の関係の大問題を解決するものではなかった。すなわち、イヴァン三世の最大の課題はルーシの再統一であったから。そのような理由から、リトアニアとの戦争は避けられず、リトアニアとの平和を支持していたパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公はリトアニア大公アレクサンデルとの交渉から事実上はずされた。さらに、彼らの失脚の前年の1498年はルーシとリトアニアの間に多くの紛争が起こっていた年であり、それらは最終的には新たな戦争でのみ解決されえた。<sup>(26)</sup>

1498年当時の貴族会議において、パトリケーエフ家の影響力には非常に強

いものがあった。12人のメンバーのうちパトリケーエフ・グループは5人であったことからその影響力の大きさがわかる。すなわち、1498年までパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の宮廷内での立場はまだ強いものであった。1494年にはヴァシーリー・パトリケーエフ公とリャポロフスキー公はリトアニアに行き、リトアニア大公アレクサンデルとイヴァン三世の娘エレナとの結婚についての取り決めを結び、翌年、リャポロフスキー公はロモダノフスキー公と共にエレナのリトアニア行きに同行した。1495年10月にはヴァシーリー・パトリケーエフ公やリャポロフスキー公はイヴァン三世のノヴゴロド行きに同行している。1496年、リャポロフスキー公はカザンに派遣された。1497年にはパトリケーエフ父子は、フョードル・クーリツィンと共にイヴァン三世の領地とヴォロツキー公の領地との交換の席に立ち会っている。1498年2月ごろイヴァン・パトリケーエフ公はモスクワ代官になっている。以上のような例を列挙してジミーンは彼ら貴族の失脚直前までモスクワの宮廷で大きな影響力を持っていたことを示した。<sup>(27)</sup>そして次のように結論している。1490年代、パトリケーエフ父子、リャポロフスキー公、そして彼らの取り巻きはイヴァン三世の政策を遂行した。その頂点は1498年のイヴァン三世の孫ドミトリーの戴冠式であった。彼ら貴族の失脚は彼らが遂行しようとして格闘していた政治方針が敗北したことを意味した。<sup>(28)</sup>以上がジミーンの見解である。

### 学説史についての検討と私見(1)

これまで研究者の主だった見解を紹介してきたが、史料や事実関係についていくつかの対立点が明らかになった。本節ではそれら対立点について検討を加えたい。まず、ソロヴィヨフが中心に用いた史料『ステペンナヤ・クニーガ』の情報の信憑性についてであるが、これについてはほぼ全員が否定的な見解で一致している。

次にパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公は、イヴァン三世の後継者

問題で孫のドミトリーを支持したのか、それとも息子のヴァシーリーを支持したのかという問題がある。チェレプニン、カザコーヴァ、ジミンらは三人の貴族はドミトリー支持グループに属したと考えた。それに対してルリエーやフェネルは否定的な見解を示し、むしろ、彼ら三人はヴァシーリー・グループに属したことを主張している。フェネルはその根拠として三点を挙げていることはすでに紹介したが、それに対してジミンが反論を加えている。フェネルの示した根拠とは次の三点であった。(1) ヴァシーリーがモスクワ大公になったとき、彼はヴァシアン・パトリケーエフをモスクワに呼び戻した。(2) 異端摘発者に近い立場をとっていた府主教シモンがパトリケーエフ父子の減刑を願い出ている。もし、パトリケーエフ父子が異端者に共感を示すドミトリー・グループに属していたなら、府主教はそうはしなかつただろう。(3) 三人の貴族に近い関係にあったロモダノフスキー公は、ヴァシーリーの母親ソフィア・パレオロークと近い関係にあった。

これに対してジミンは批判を加えている。まず(1)について。ヴァシアン・パトリケーエフがモスクワに戻ってきたのは、ヴァシーリー三世がモスクワ大公位に就いて直後のことではなく、1510年頃であった。ヴァシーリーは1502年にモスクワ大公として即位し、イヴァン三世の共同統治者となっている。そして、1505年にイヴァン三世が亡くなり、ヴァシーリー三世が一人で統治を始めた。もし、ヴァシアンが以前からヴァシーリー・グループに属していたなら、ヴァシーリー三世が一人で統治を始めた1505年直後にヴァシアンを手元に呼び戻しているはずである。ヴァシーリー三世がヴァシアンを許し、流刑を解き、モスクワに住むことを認めたのは少し後のことである。ヴァシアンがモスクワに戻り、ヴァシーリー三世の下で権勢を振るうのは、モスクワ大公とヨーシフ派の仲が決裂して以降のことであるというのがジミンの見解である。<sup>(29)</sup>

ヴァシーリー三世が一人で統治を始めた1505年当時、異端摘発に積極的で

あった修道院長ヨーシフ・ヴォロツキーは、教会内においても強い影響力を持っていた。また、ヴァシーリー三世のヨーシフに対する態度も好意的であったと考えられる。例えば、ヨーシフの弟ヴァシアンはロストフ大主教に任命されている。<sup>(30)</sup> ヨーシフは自分にとって好ましい環境の中で、かなり強引な修道院運営をしていったようである。ヨーシフの修道院は大公領ではなく、イヴァン三世の弟ボリスの子供、すなわち、ヴァシーリー三世の従兄弟フョードル・ヴォロコラムスキー公の領地にあった。そこはモスクワ府主教座ではなくノヴゴロド大主教座に属していた。ヨーシフと共に異端摘発に積極的であったノヴゴロド大主教ゲンナジーの頃、両者の関係は良好であった。しかし、ゲンナジーは1503年の教会会議での決定に違反した罪で解任され、後任にセラピオンが就く。新任のセラピオンは必ずしもヨーシフに好意的ではなかったらしい。また、ヨーシフとヴォロコラムスキー公との関係も悪くなる。そこでヨーシフは自分の修道院をフョードル公の管理下からモスクワ大公の直轄下に移すことを願ひ出る。それは、ノヴゴロド大主教からモスクワ府主教の監督下に移ることを意味した。大主教には知らされず、ヴァシーリー三世も府主教シモンもヨーシフの願ひを受け入れた。これに対してノヴゴロド大主教セラピオンは不満を持ち、ヨーシフと争うことになるが、結局、彼は教会裁判で有罪となり、1509年、大主教の職を解かれる。

ヨーシフのこの強引な手法にヴァシーリー三世は不快感を示し、逆に、セラピオンに同情を示したと思われる。なぜなら、ヴァシーリー三世はモスクワの聖アンドロニク修道院に幽閉されていたセラピオンを彼の出身修道院である聖三位一体セルギー修道院に移すように命令しているからである。セラピオンはその修道院で賓客として迎えられ、そこで余生を送り、1516年に死去した。ヨーシフの強引な手法を嫌い始めたヴァシーリー三世は、おそらく、ヨーシフを牽制する意味で、彼と敵対していたネスチャジャーチェリの代表者ヴァシアン・パトリケーエフをモスクワに呼び戻したのであろう。その後、1511年に府主

教シモンが亡くなるが、その後任にはヴァシアン<sup>31</sup>の推薦でネスチャジャーチェリ（非所有派）の一人ヴァルラームが就いている。当時、ヴァシーリー三世がヴァシアンを非常に信頼していたことがうかがえる。

ヨーシフとヴァシアンが以前より論争していたことはヴァシーリーも知っていたと思われる。ヴァシアンは幽閉先の聖キリロ・ベロゼルスキー修道院で二つの著作、『ある長老の著作』と『キリル修道院の長老の答え』を著している。これらの作品でヴァシアンはヨーシフを激しく非難している。<sup>(31)</sup>このことから、ヨーシフを嫌い始めたヴァシーリー三世はその反対者であるヴァシアンに目をつけたと考えられる。ヴァシーリー三世がヴァシアンを自分の手元に置き、権勢を振るわせたのは、かつて自分をイヴァン三世の後継者として支持してくれたからではないと考えられる。

フェネルの二つ目の根拠、すなわち、府主教シモンの請願についてもジミーンは次のように批判している。シモンについてはそれほど単純ではない。1498年にシモンはドミトリーの戴冠式を行い、大公として祝福した。また、1499年1月、イヴァン三世がノヴゴロドの教会領を世俗化したとき、それを祝福した。しかし、1503年の教会会議では、イヴァン三世の教会領・修道院領の世俗化案に徹底的に抵抗し、また、1504年の教会会議ではそれを司会し、異端者たちを裁いた。そして、彼は1511年に府主教座を去るまで異端摘発の指導者であったヨーシフ・ヴォロツキーを擁護し続けた。すなわち、1499年のシモンの行動を考えると、1503年から11年までの出来事を引用することは意味がない。府主教シモンの立場は時代によって揺れている。ジミーンはこのように述べて、1499年当時、シモンが異端摘発のグループに属していて、ドミトリー・グループと距離を置いた関係にあったとは必ずしもいえないと批判している。<sup>(32)</sup>

三つ目の根拠としてフェネルはリャポロフスキー公と親戚関係にあったロモダノフスキー公について検討した。そして、彼が以前に貴族として仕えてい



た分領公ミハイル・ヴェレイスキーの息子がソフィア・パレオロークの姪と結婚していたという関係から、リャポロフスキー公もヴァシーリー・グループに属したと考えた。しかし、これも説得力をもたない。ジミンもこの考えに対し、この証明だけでは不十分であるとしている。<sup>(33)</sup>以上の点から、パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公はヴァシーリーのグループに近かったというフェンネルの見解は説得力を持たない。

いま一つの対立点であるパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公は親リトアニア派であったのか否かについて検討を加えたい。前節で紹介したように、チェレブニーンは彼ら三人の貴族は親リトアニア派であったと考えている。ジミンも彼らガリトアニアとルーシの友好関係を支持していたと考えている。<sup>(34)</sup>これに対してカザコーヴァは、彼ら貴族がドミトリー・グループに近い関係にあったとする点については同意するが、彼らが親リトアニア派であったとする点については否定的である。彼女は、前節でリトアニア使節がモスクワでパトリケーエフ家に近づいたのも、また、息子のヴァシーリー・パトリケーエフがリトアニアへの使節として派遣されたのも、パトリケーエフ家がモスクワの宮廷で大きな影響力を持っていたからに過ぎず、それをもって親リトアニア派であったとは言えないと述べている。それならばヴァシーリー・パトリケーエフ公とリャポロフスキー公がイヴァン三世の書記官でノヴゴロド・モスクワ異端の共鳴者であったフョードル・クーリツィンと共に外交上の重要な任務を担ってきたからといって、彼らが近い関係にあったということも言えなくなる。彼らが共に外交上の、また、内政上の重要な任務を担ってきたのは単にモスクワ大公の命令に従ったことだけであったとも考えられる。そして、パトリケーエフ父子やリャポロフスキー公とクーリツィンの関係の近さが証明されなければ、彼ら失脚した貴族はドミトリー・グループに属していたというカザコーヴァの説明も成り立たなくなる。

カザコーヴァもそれは認めている。そして、ヴァシーリー・パトリケーエフ

とクーリツィンの関係の深さを示し、三人の貴族がドミトリー・グループを支持した証拠を補う形で次のように述べている。「もちろん、パトリケーエフ父子とクーリツィンが共同で職務に当たっていたからといって、それが彼らの近い関係を証明するものではない。しかし、もしその痕跡がヴァシーリー・パトリケーエフの後の著作の中に観察される異端者のイデオロギーの影響をそれに加えるとすれば、これらの事実はパトリケーエフ父子とドミトリー・グループの中心人物であったエレナ・ヴォロシャンカの取り巻きとの間に存在していた実際の関係の証言者となるだろう。」<sup>(35)</sup>

しかし、カザコーヴァが主張するようにヴァシアン・パトリケーエフの著作の中にはノヴゴロド・モスクワ異端の影響を見ることはできない。ヴァシアンはネスチャジャーチェリの代表者の一人であり、ネスチャジャーチェリの思想とノヴゴロド・モスクワ異端の思想の間にはなんら繋がりを見出せないからである。一例を挙げる。ヴァシアンの著作に『ある長老の著作』があることは先に述べた。この著作は、修道院の土地所有に反対するものである。それによると、修道士は村を持つべきではなく、また、それらを管理すべきでなく、静かに沈黙の中で暮らし、自分の手で生活の糧を得るべきであると述べられている。そして、修道院は本来土地を持たず、修道士は人里離れた場所で祈りと労働の生活を送ってきたが、寄付を受け、財産を持ち、修道院が豊かになるにつれ世俗での生活となんら変わらなくなっている。それゆえ、修道院は財産を放棄すべきであると主張している。<sup>(36)</sup>すなわち、この作品は自分の論争相手ヨーシフ・ヴォロツキーの修道院をはじめとする大規模な修道院に向けられた非難の書であった。ノヴゴロド・モスクワ異端も修道院に対して批判を加えていたが、彼らは修道院の財産所有について非難したというより、修道院の存在そのものを否定していたと考えられる。<sup>(37)</sup>それゆえ、ヴァシアンを代表者とするネスチャジャーチェリの考えとはまったく相容れないものであった。

## むすびにかえて 学説史の検討と私見（2）

最後に三人の貴族の失脚の原因についての研究者間の対立点を検討したい。すなわち、リャポロフスキー公の処刑とパトリケーエフ父子の流刑の原因はイヴァン三世の後継者をめぐる争い、いわゆる、「王朝危機」にあったのか、それとも、対リトアニアの外交問題にあったのかという点である。

パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚の原因をイヴァン三世の後継者争いに結び付けているのはカザコーヴァだけである。多くの研究者はモスクワのリトアニアに対する外交問題をその原因としてあげている。先に紹介したように、ルリエーは1499年当時ドミトリーの大公としての立場がまだ保たれていたことを指摘し、三人の貴族の失脚を後継者争いとは切り離して考えている。

それでは対リトアニアの外交問題についてはどうであったのか。ソロヴィヨフは、1503年にポーランド王に派遣された使節団へのイヴァン三世の指示を引用し、セミョーン・リャポロフスキー公とヴァシーリー・パトリケーエフ公の外交使節としての振る舞いの不適切さが彼らの失脚の原因となったと述べた。この考えについてカザコーヴァが批判していることは先に紹介した。すなわち、1494年に起こした失態にもかかわらず、彼ら三人の貴族はなぜ5年後に処分されたのか。そして、1499年まで国家の重要任務を任せられ、遂行することが許されたのかという反論であった。

A.Л. ホロシケーヴィチは、1490年代のモスクワ外交におけるモスクワ大公イヴァン三世の称号問題を詳しく検討しているが、その過程でパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公失脚の原因についても言及している。彼女によると失脚した大貴族たちはリトアニアとの平和を求めるドミトリー・グループに属していた。彼らが犯した罪は1494年にイヴァン三世の娘エレナに付き添ってリトアニアに出向いたとき、条約文書のなかにイヴァン三世に対する「全ルーシの君主」という称号を入れ忘れたことにあった。<sup>(38)</sup> 以上のように述べるホ

ロシケーヴィチは、パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚の原因をイヴァン三世の称号をめぐる彼らの外交上の失策に帰している。彼女の考えに対し、ジミーンは、失脚の原因のすべてを表しつくしているとはいえないと述べている。<sup>(39)</sup> 称号問題をめぐる貴族の失敗についても、先に述べたカザコーヴァのソロヴィヨフへの反論と同じで、なぜ5年後に咎められたのかに疑問が生じる。

チェレプニンとジミーンはパトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚の原因をイヴァン三世の対リトアニア外交政策の転換に求めている。すなわち、イヴァン三世がリトアニアとの平和政策から戦争へと政策転換したことが彼らの失脚の原因になったと主張した。彼らの見解には説得力があるが、疑問の点も残る。イヴァン三世はいつの時点で政策を転換したのか、果たして、政策転換をしたのかという点である。二人の説明によると、1494年から1499年の間にイヴァン三世はリトアニアとの友好的な関係を破り、戦争に突入したことになる。しかし、フェネルによるとイヴァン三世は1494年以前からリトアニアとの本格的な戦争の準備に入っている。すなわち、1489年以前から、イヴァン三世はリトアニアの西部国境への小規模の侵攻を繰り返している。<sup>(40)</sup> 彼はリトアニアを挑発し、苛立たせ、来るべき本格的な戦争においてイニシアチブをとろうとした。そして、開戦への最終的な布石は1494年のリトアニア大公アレクサンデルとイヴァン三世の娘エレナとの結婚であった。

1494年の結婚に際し、イヴァン三世はアレクサンデルに条件をつけている。それは、ロシア正教を信仰してきたエレナを結婚後もアレクサンデルの信仰であるローマ・カトリックに改宗させないという条件であった。<sup>(41)</sup> このほとんど守ることのできない約束をアレクサンデルにさせたことで、イヴァン三世はリトアニアとの開戦の口実を手に入れたことになる。以上のように1494年にはすでにイヴァン三世はリトアニアとの本格的な戦争を視野に入れていたことになり、リトアニアとの友好関係を続ける意思は最初からなかったと思われる。

る。イヴァン三世がモスクワ大公として即位して以来、彼の最大の政治課題は、全ルーシの統一であり、それを完成させるためには、リトアニアに占領されたキエフ・ルーシ以来の領地を取り戻さなければならなかった。リトアニアとの領土奪回のための本格的戦争は統治の初めから視野に入っていたと考えてよい。それゆえ、政策転換というのは疑問であり、失脚した三人の貴族もイヴァン三世の政治課題を理解していたと思われる。1500年から始まるリトアニア戦争については稿を改めなければならないが、1499年までイヴァン三世は自分の最終政治課題であったリトアニア戦争への準備を着々と進めてきた。パトリケーエフ父子とリャポロフスキー公の失脚はイヴァン三世の戦争への最後の準備だったのだろうか。

もう一点疑問に思う点がある。三人の貴族の失脚の主原因がリトアニアに対する政策転換にあったとして、パトリケーエフ父子（修道院に流刑）とリャポロフスキー公（処刑）との間の処分の違いも外交政策に関連したものであったのかという点である。処刑と流刑の差はどこから生れてきたのかが説明されていない。この問題については史料がまったくないことから憶測しかできないが、今後の課題として考えるために言及したい。1498年の貴族会議では、パトリケーエフ家は筆頭貴族であり、セミョーン・リャポロフスキー公は四番目に位置した。<sup>(42)</sup>この身分の差が処分の差になって現れたのか。あるいは、職務上の失敗の程度の差によるものなのだろうか。すなわち、1494年のリトアニアへの使節団にはヴァシーリー・パトリケーエフ公も参加しているが、そのときの団長はリャポロフスキー公が務めている。このときの責任の重さが処分の差となって現れたのだろうか。これらのことは、しかし、考える必要はないと思える。なぜなら、イヴァン三世は最初三人全員を処刑するつもりであったと考えられるから。年代記の情報が正しければ、イヴァン三世はモスクワ府主教シモンと主教たちの請願を聞き入れ、パトリケーエフ父子を処刑ではなく、流刑に変えた。<sup>(43)</sup>

府主教シモンと主教たちはなぜパトリケーエフ父子の助命嘆願をおこなったのだろうか。シモンはパトリケーエフ家と個人的に親しかったからなのか、あるいは、パトリケーエフ父子が属していたモスクワ大公ドミトリーのグループからの働きかけがあったのか。これらの点も今後の課題とする。

また、シモンや他の主教たちの嘆願をモスクワ大公イヴァン三世が受け入れて、パトリケーエフ父子は処刑されるどころを流刑に減刑されたという先の年代記の情報が正しいものと仮定し、果たしてシモンのイヴァン三世に対する影響力がそれほど大きいものであったかどうかも疑問である。シモンの大公に対する影響力、さらには、当時のイヴァン三世とロシア教会の関係についても検討されなければならない。仮に、シモンやロシア教会の嘆願の影響があったとしても、やはり、リャポロフスキー公についてはなぜ嘆願がなされなかったのかという疑問は解けない。

## 註

- 1 Полное Собрание Русских Летописей( ПСРЛ と略記 ), т. 28, М., 1963, стр. 331.
- 2 ПСРЛ, т. 26, М-Л., 1959, стр. 291.
- 3 А.А. Зимин, Россия на рубеже 15-16 столетий, М., 1982, стр. 160.
- 4 ПСРЛ, т. 21 ч.2, СПб., 1913, стр. 571-2.
- 5 С.М. Соловьев, История России с древнейших времен, т. 5, М., 1989, стр. 61.
- 6 Сборник императорского русского исторического общества, т.35, СПб., 1892, стр. 428.
- 7 Н.А. Казакова и Я.С. Лурье, Антифеодальные еретические движения на Руси XIV начала XVI века, М-Л., 1955, стр. 167-8.

- 8 Там же, стр. 168.
- 9 Л.В. Черепнин, Русские феодальные архивы XIV-XV веков, ч. 2, М., 1951, стр. 306-10.
- 10 ПСРЛ, т. 12, СПб., 1901, стр. 248-9.
- 11 Л.В. Черепнин, стр. 315.
- 12 Его же, стр. 315.
- 13 Там же, стр. 307-9, 314-5.
- 14 モスクワの内乱については以下を参照。拙稿「モスクワ公国の内乱について」、『紀要』(名古屋明德短期大学)第14号、平成11年3月、309-318ページ。
- 15 Л.В. Черепнин, стр. 315.
- 16 Н.А. Казакова, Очерки по истории русской общественной мысли, Л., 1970, стр. 95.
- 17 Там же, стр. 96-7.
- 18 Там же, стр. 98.
- 19 С.М. Каштанов, Социально-политическая история России конца XV-первой половины XVI века, М., 1967, стр. 110.
- 20 Н.А. Казакова, стр. 98-9.
- 21 Там же, стр. 99.
- 22 J.L.I. Fennell, Ivan the Great of Moscow, Lond., 1961, pp. 348-350.
- 23 ПСРЛ, т.24, М., 2000, стр. 213-4.
- 24 J.L.I. Fennell, p. 352.
- 25 Ibid.
- 26 А.А.Зимин, стр. 177.
- 27 Там же, стр. 171-2.
- 28 Там же, стр. 176.

- 29 Там же, стр. 167.
- 30 シーモノフ修道院の掌院から 1506 年にロストフ大主教に叙任される。
- 31 Н.А. Казакова, Вассиан Патрикеев и его сочинения, М-Л., 1960, стр. 223-230, 250-253.
- 32 А.А. Зимин, стр. 168.
- 33 Там же, стр. 169.
- 34 Там же, стр. 171.
- 35 Н.А. Казакова, Очерки, стр. 98.
- 36 Н.А. Казакова, Вассиан Патрикеев, стр. 224-5.
- 37 Просветитель Иосифа Волоцкаго, Казань, 1903, стр. 35.
- 38 А.Л. Хорошкевич, 《 Об одном из эпизодов династической борьбы в России и в конце XV века 》, История СССР, 1974, Но. 5, стр. 134-8.
- 39 А.А. Зимин, стр. 170.
- 40 J.L.I. Fennell, p. 132.
- 41 Ibid. p.154.
- 42 А.А. Зимин, стр. 170-1.
- 43 ПСРЛ, т.26, стр. 291.

なお、本稿作成に当たり文献収集などで北海道大学文学部の宮野裕氏に便宜を図っていただきました。末節ながらここに御礼申し上げます。

\* 本稿は平成 14 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)(2) 課題番号 14510424）による研究の一部である。